

らば仏陀は、十二縁起説で云う無明、渴愛の滅をなしとげた生存をなされていたとみることが出来る。

又この十二縁起は四諦を内含している故に仏教真理を具現させるための八聖道実践の要求が積極的になされるのである。即ち八聖道実践を一口で云うならば、法の認識を意味すると思う。又それが理想としての解説を現実の生活の上に実現させることを可能とするのである。かくの如き解説は、心身の調和を得た二辺を離れた中道であつて正しい世界観、人世観を確立せしめた人間生存を云うのである。

「普賢菩薩行願讃の研究」

村 下 奎 全

行願讃には幸にしてネパール伝その他の梵本と共に、八〇六年空海によつて請来され、江戸時代慈雲尊者がこれを研究解説した日本伝本もあり、その近代の最初の研究は我が渡辺海旭ドクトルを以て始まる。渡辺氏はドイツのストラスブルグ大学留学中、本讃の総合的な研究を

行ないロイマン博士のドイツ訳を付して Die Bhāradraçari, eine probe buddhistisch-religiöser Lyrik, untersucht und herausgegeben と題して一九二二年ライプティヒから出版した。而し残念なことに、この書は現在では希観書に属して容易に見ることができない。不充分なものではあるが私の本論巧に副論文として対照本を提出したのはこの間の事情によるのである。

行願讃は梵文の他にチベット訳 *q.dngs pa bzang po spyod pah smin lam gyi rgyal po* 漢訳五本があり、更にウイグル、西夏、コータン、蒙古語訳等がある。そして *Sank idera* の *Sikshā Tsamaccaya* 中にはその第五、五六の両偈が引用されており、楽邦文類にも引用があるのである。以ていかに本讃が広く行なわれたかを思うべしである。渡辺氏の後を受けて故泉芳環教授は本讃の研究に意を注いだがそれは幾多の論文として公表されており中に英訳 *The Hymn on the Life and Vows of Samantabhadra, with the Snt Text,*

Bhadracaripranidhana がある。この梵本からの正確な訳に対してこれを理想的に追求して訳したものにベアトリス鈴木夫人の The Vows of Samanītabhaera (The Impressions of Mahayana Buddhism 所収) がある。夫人は普賢行願こそ大乘菩薩道の面目であると言う立場に於てマハトマ・ガンデイやシユヴァイツァー博士を見出した。彼女は彼等こそ bodhisattva だと言っている。

行願讃は成立史的に追求してみると普賢菩薩と言う個人の行願などではなく、大乘の菩薩道を普賢行として打出した人々の人生の理想であつたことがわかる。そこには般若、華嚴、浄土の大乘仏教のエレメントが共に含まれているのである。

そして最も重要なことは唐の般若の訳した四十巻本の華嚴經入法界品の最後にそれ迄別行していた行願讃があたかも一經の結論の如くに結合されたことである。現存する入法界品の梵本である Gandavyūha の中にも亦チベットの華嚴經の同品 sdon pos brygan pa の中にも共にその結合された形で入っている。そして

の時に長行の部分が 頌の前に付加えられて わゆる普賢の十大願が完成したのである。それは(一)礼敬諸仏、(二)称讚如来、(三)広修供養、(四)懺悔業障、(五)随喜功德、(六)請転法輪、(七)請仏住世、(八)常随仏学、(九)恒順衆生、(十)普皆回向がこれである。

どうして本讃があのかの仏教のビルドダウングスローンとして有名な入法界品に結合されたかは容易に結論し得ないが少くとも入法界品自身の思想の中にその必然性がなければならぬ。そう考えて入法界品を検討してみると例えば第一の善知識である文殊が善財童子にいよいよ五十三人の善知識を求めて南行せよと勧発する重要な偈の中に次の如く言われるのである。

ye bodhisattva sudridhā akhinnama-
nasah sam̐sāri te cari / samantabh-
adrām labhate aparājitam asaṅgām
hi //3// Gānd p571.17~18

若し菩薩ありてこの生死の中に於て心賦わねば必ず普賢行を得し自由無疑なるべし。

caritavya halpaṣṭāgara anantamadnya
agesaksetreṣṇ / paripñhitavya
prānidhi eamantabhadracarāyāyām

無辺なる一切国土の劫海に行ずべし

いみじき普賢の行願を成満すべし。

これによつてあの善財童子の求道は、たゞ一つの目的即ち普賢行を行願することにかゝつてゐることに気づくのである。行願讚の結合されたのはごく自然のことである。

そしてこの行願讚の立場を最も代表する行願は何であるかを考えるならばそれは常随仏学と恒順衆生にしばらくされる。その他の行願は智度論や大乘の悔過経類にも語られてゐるところであつて、本願独自の立場ではない。この二つの行願こそは一方に如来の悲願を受けつき（仏学とはこのこと以外にない）他方にこれを衆生に分ち与える立場（行とは本来的にそう言うものがある）が示されるのである。それはまじしく如来出現 *tathāgata* *daka atpadyate* の根源に参加することであるが故に如来の寿命の永遠性によつて普賢行も亦無久であることが約束されるのである。

pranidhanagotrārnavam bhayānān / ye
servaksetresvaparāntacaryāi saman-
tadhadrān neyesa tesām // 17 // Gāṇḍ
p323120~21

三世に渡る仏海の誓願種より生れ出て、時を尽して終むるは、これぞ普賢の行となり。

sātvacarīm anuvartayamāno bodhica-
rīm paṅpṛayamanah. bhadracarīm ca
prabhāvayamānaḥ sarvi anāgatakalpa
careyam // 22 // Gāṇḍ P544125~26

衆生の行に随つて、覺りの行を満しつゝ、普賢行を究めてぞ、我は行ぜん。時そのものゝ果てるまで。

